月下下車~かげろふ~

秋住　貢

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
月下下車~ かげろふ~

【Ｎコード】
Ｎ４０７０Ｏ

【作者名】
秋住　貢

【あらすじ】
人はここを「虫の国」と呼んだ。人と同じように何十年も生を永らえられるようになった虫たちが、土地に住む神に同じく人のような体を望んだことから、この国の歴史は始まった。
トンボにカゲロウ、ゲンジボタルやミツバチ、テントウムシ……そして人間。
空を超える鉄道をめぐる、彼らの物語。

序

眩しいぐらいに月が重複している。おぼろげにかすんだそれをめがけて、腕をつき伸ばせば、滑らかな水面に突如波が生まれる。
池縁の草の葉が、それに触れて少し揺れた。澄み切った水の音はまだ軽く、一向に砂気の抜けない川底の土に触れ、僕は顔をしかめた。水底には僕の腕の影だけが、透けた黒で現れている。

「まだ温い、か」
粗い砂を掴んで持ち上げると、透明な水が洩れた砂で霞んでゆく。まだ手に残る荒い底砂は、さ、と笹林を駆け抜ける風にも動じず、じっと僕の顔を見つめている。冷えたのは濡れた僕の腕だけだ。
ざぶ、とまた腕を池に入れ、開いた指で水をかき混ぜると、もう手には何も残らない。手ぬぐいを取り出して肘まで拭くと、僕は肩のたすきを解いて、濡れた手ぬぐいに結んで懐にしまった。
何度手を尽くしても、頑として、この池は己の純粋を失おうとはしてくれない。池は濁らないと誰も住めないのに、ひたすらに澄みきっていようとする。憎らしくもあるが、羨ましいとも感じる。水面のではなく真実の朧月を見上げると、その淡さが僕の瞳の奥を冷やした。
ごぉぉぉぉぉ……

日常に染み付いてしまった列車の音に混じって、笹を掻き分ける音がしたので振り返った。
「池の調子はどうだい？」
「旦那様」
花でいっぱいの桶と柄杓を持って、やんわりと笑う。
「一進一退、ともいえない状態で。縁の草は勢いがいいんですが」
首を振って答えると、
「なんとも頑固だね。毎日足を運ぶお前の気持ちになってほしいなあ」
よしよしと慰めるように頭を撫でてくる。それにすこし甘えて、僕は愚痴をこぼした。
「僕ではだめなのでしょうか」
「そんなことはないよ。私も不勉強なのがいけない」
「いいえ、勉強などとんでもないです。今の旦那様のお仕事は、早くお元気になることですから。朝も咳いておられたでしょう。また起き上がったりなどなさって……」
熱を測ろうと詰め寄ると、手で遮り、首を振った。
「それ以上の小言は聞かないよ」
もうすっかりいいんだ、と、少し火照った顔をほころばせる。
「それに、今日は大事な日だったことを思い出してね」
と、両手一杯の荷物を、少し掲げて見せた。終わりの山百合、はりはりとした鬼灯……合点がいった。
「それは……蝉の一族に？」
旦那様は目で頷いただけだった。
「先に行っているから、池の水を汲んできてくれるかい」
「かしこまりました」
花と柄杓を持って旦那様が笹林の中に消えると、僕は桶の、土で汚れていた部分を池の水で清めた後、逡巡してから、静かに朧月ごと汲み上げた。

片手で桶を持ち、草を掻き分け進むと、笹林の東側、そのずっと向こうで、鈴虫が奏でる音が聞こえてくる。風が首筋を撫ぜる時の思いがけぬ涼しさに、先を行った旦那様に障りはしないかと、歩を早めることにした。

薄ぼんやりと灯る、旦那様のランプの明かりを頼りに歩く。道を塞ぐ葉を避けつつ、その鋭さに指を切りつつ、「旦那様」、呼ぶと、「ありがとう」、と。参るものもおらず、荒れていたであろう墓が美しく整えられており、旦那様は、竹の枝で作られた線香立てに線香を供えていた所だった。こほ、と小さく咳をした後、柄杓を手渡しながら

「お前は水をその花へ。線香にはふれないように。小さな火でも危ないからね」

言われた通りに柄杓で、連なる二十の墓の横に立てられた花の上に、倒れないよう優しく水をかけてやる。じわじわ、と水が土の中にしみこむ音が、死者の嚥下に聞こえて切なくなった。歌うたいの彼らだから、きっと何より水を喜ぶに違いなかった。

最後の一滴が、土の下に沁み込んだ。旦那様は懐から紅玉の数珠を取りだし、掌でいとおしそうに転がしてから、静かに合掌する。

「今年最後の山百合です。いつもに増して、暑い夏でございました。こちらはあいかわらずです。どうぞご心配なさらずに、安らかにお眠りくださいますよう……」

そうして旦那様の拝む横で、僕も屈んで、手を合わせた。

短く祈りを胸の中で唱えた後、旦那様は立ち退きざま、振り返って墓の下の住人に話しかけた。

「今年の夏の寂しさを、嘆かぬものなどこの国にはおりませんでしたよ」、と。

来た道を、月明かりを頼りに探り探り歩く。伸びた草の露を払いつつ、
「一周忌でしたね」
ゆっくり歩く旦那様の横に並ぶと、
「そうだよ。早いように思うが、そろそろ……」
言いがたそうに苦く笑い、土の下の楽器はもう腐っているだろうかね、と呟いた。
僕は黙っていた。ひゅっ、ひゅっ、と癖の様に、しかしそれさえかき消すように、旦那様は息をした。

彼らを、蝉の一族を、ここに埋めたのは僕たちだった。僕が穴を掘り、そして旦那様が歌うたいである彼らの仕事道具――楽器を、彼らとともに葬ることを決めたのだった。

「トンボ」
ふいに旦那様が、僕の名を呼んだ。
「はい」
「仕事の途中だったろう。……邪魔してすまなかったね」
「いいえ。もう上がりです。それに」
旦那様の呼吸が気になっていた。辛い時に辛いと言えない、これも旦那様の立派なご病気だ。
掌を額に当てるようなことはせず、荷物を全部受け取って、空いた手を繋いで笑った。
「帰りましょう。みなが待ってます」
そうだなあ、と。嬉しそうに微笑む旦那様が、僕の目の中で重複する。
「トンボ」
「なんでしょう」
空の月を見上げながら、ひゅ、と息をして。

「私は、そのままがいいと思うんだよ」
少し考えて、分かった。楽器の事だと思った。
土の下でも、地上にその歌が聞こえなくても。彼らが爪弾けるならそれで。そのままで。
朧月を振り仰いで、僕は声に出さずに是、と答えた。

人はここを「虫の国」と呼んだ。人と同じように何十年も生を永らえられるようになった虫たちが、土地に住む神に同じく人のような体を望んだことから、この国の歴史は始まった。
生を重ねるごとに「虫」達は自我を保ち同族で群れ、そして「社会」が築かれた。
しかしそれぞれの性質はなんら変わらない。僕は「とんぼ」で羽根もあるし、同じものが何十にも重なって見える。牙はないが代わりの剣は持っているし、そして「塩辛とんぼ」の「雄」であるので髪は銀色で、然る故に僕は「トンボ」である。
同じく「ゲンジボタル」は薄紙の提灯を腰に帯びているし、「ミツバチ」は鋭い毒針を懐に隠し持っている。「テントウムシ」はナスが好きで、「カゲロウ」は長くは生きられない。
宿命は宿命であり続け、そしてこれからも何一つ変わるものなく、全てを支配することができるのは時の流れのみであり、僕達はあくまでも「虫」であるのだと。
そうだ「全て」は「統べて」であったのに、たった一つのものがこの国に来てからそれらが「総て」ではなくなって、僕らは徐々に「虫」になりつつある。
そう、呪うべきは笹林を過ぎ行くあの光。連なる窓から放たれる、命を焼き尽くすその光。身が潰れるようなあの轟音。
この国を恐るべき速度で駆け抜ける、空をも超えるあの鉄道が、

僕の「総て」を変えたのだった。

「明日は雨でも降るといいね」
旦那様が祈るように呟いたのは、ずいぶん前のことである。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4070o/

月下下車~かげろふ~

2010年11月16日02時26分発行